

## 39. 新旭町堀川遺跡の現況

### 1

堀川遺跡は、昭和45年に湖西線敷設工事に伴う発掘調査が行なわれて以来、数次の発掘調査が実施され、次第にその全貌が解明されつつある。ここに、昭和53年度調査時において検出された竪穴住居跡について紹介をしたい。

本年度までに確認された遺構としては、古墳時代から鎌倉時代にかけてのものがあり、特にこれら検出された遺構の中では、平安時代の掘立柱建物が多い。出土遺物は、弥生時代から鎌倉時代の遺物が出土している。

平安時代の掘立柱建物は、今までに16棟が検出されているが、すべてが倉庫形式の建物であり、方位もほぼ一致するという特徴を持っている。特に50年度調査によって検出された11棟の建物は、数度にわたる建て替えが行なわれており、また多くの出土遺物は本遺跡の性格を知る上で注目すべきものである。

これに対し、古墳時代の遺構は、掘立柱建物が4棟、竪穴住居跡が1棟検出されている。竪穴住居跡については、検出状況から判断して、竪穴住居跡かどうかという疑問が持たれるが、本年度調査によって新たに3棟の竪穴住居跡が検出されたことは、本遺跡の内容を把握する上で重要となってくるであろう。

### 2

本年度の調査によって検出された竪穴住居跡は3棟を数え、1棟(SB1)は堀川遺跡の東端にあたり、残り2棟(SB2・SB3)は下花貝地区に所在する。いずれも、調査範囲が限られたため完掘できなかった。

**SB1** (挿図1の1・挿図2) 湖西中学校増改築工事の事前調査によって検出された方形の竪穴住居である。北西辺4m以上、北東辺3.6m以上を測り、遺存する床面までの深さは、約20cmを測る。柱穴は北西壁近くより2個検出され、いずれも直径約20cmを測り、検出位置から判断して、4本柱の構造を持つ竪穴住居跡である。周溝は、検出されなかった。カマド跡が、北西壁のほぼ中央よりに壁面を掘り込んで検出された。土器は、カマド付近より出土し、土師器を主としている。

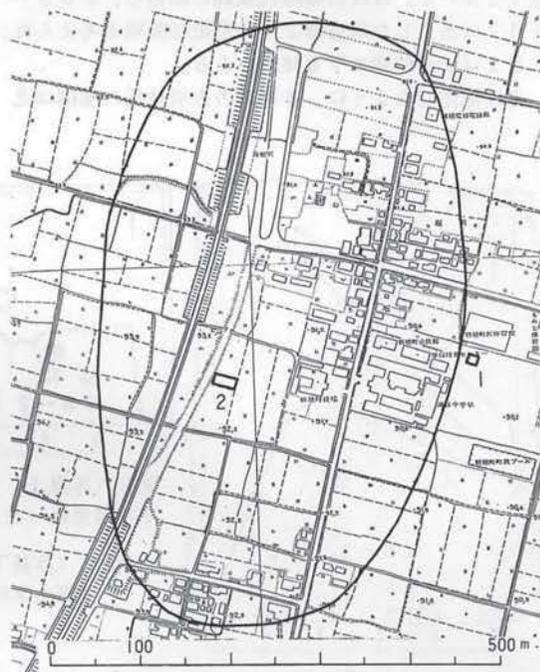


図1 堀川遺跡位置図及び調査地区  
1. 湖西中学校 2. 下花貝地区

**SB2** (挿図1の2・挿図3) 宅地造成に伴う調査によって検出された方形プランの竪穴住居で、北辺7.2m、西辺3.4m以上を測り、床面までの深さは約30cmを測る。柱穴は、2個検出され、直径約30~40cmを測り、検出位置から判断して、4本柱の構造を持つ竪穴住居跡である。周溝は、検出されなかった。東壁近くに大きなピットが検出され、貯蔵穴かと思われる。北壁のほぼ中央よりに焼土が検出された。土器は、焼土付近及び北東隅より出土し、須恵器高杯・杯蓋、土師器甕、土錘等が出土している。

**SB3** (挿図1の2、挿図3) SB2と重複して検出され、切り合い関係よりSB2に先行する竪穴住居である。方形プランの竪穴住居で北辺6m以上、西辺3.4m以上を測り、床面までの深さは約20cmを測る。柱穴は2個検出され、直径約40cmを測る。検出位置から判断して4本柱の構造を持つと思われる。周溝は、検出されなかった。北壁中央よりに焼土が検出された。

出土遺物は、焼土付近を中心として出土し、器種・数量ともSB2に比して少ない。

### 3

本年度調査の中で、特に竪穴住居跡について紹介してきたが、最後に若干の考察を加えておきたい。

新たに、検出された3棟の竪穴住居跡の年代については、現在、出土遺物を整理中のため詳細な時期を記述できないが、ほぼ古墳時代後期に相当し、SB3・SB2は出土した須恵器より6世紀初頭頃と考えられ、SB1は少し時期が下る傾向にある。

先に記述したように、本遺跡の古墳時代の遺構は乏

しく、本遺跡の内容を把握する上での欠陥となっていたのであるが、本年度調査によって3棟の竪穴住居跡が確認されたことは、この欠陥を補う上で重要であり、古墳時代において堀川周辺で生活が営まれてきたことが実証された。特に、本遺跡の東端にSB1が検出されたことは、本遺跡の中央部においても、古墳時代の遺構が存在する可能性を持っており、また堀川遺跡の範囲が明確にされたと同時に、さらに広がることが予想され、今後の調査に期するところが大きいといえる。詳細は、本年度調査の略報に記述することにした。

(水口高志)

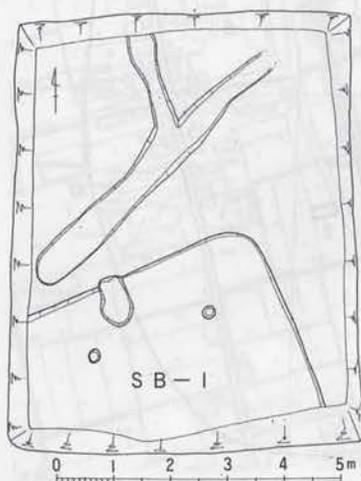
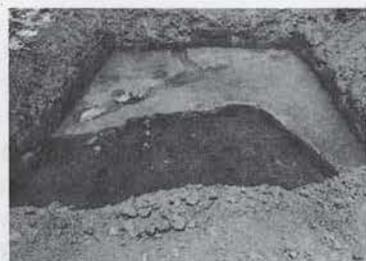


図3 (写真上)  
下花貝地区 (左. SB-2. SB-3)  
← 図2 (写真下)  
湖西中学校 (SB-1) →



## 40. 滋賀県出土の子持勾玉

### 一南滋賀遺跡出土の子持勾玉から一

#### 1

南滋賀遺跡は、弥生時代から平安時代にわたる生活の痕跡をもち、なかでも、大津京関連遺跡である史跡南滋賀町廃寺の存在が目目される。

当遺跡内において昭和53年9月から宅地造成に先立つ事前調査を行なった。

当該地点は、寺域内に存在し、史跡指定地と接している。その為に、当初、寺院関係の建物の検出が予想されたが、予想に反し、寺院関係の遺構は検出されず、それよりさらに古い時期の遺物・遺構の検出があってその中には、祭祀遺物といわれる子持勾玉が含まれていた。

県内では、今回のもの以外に4個の出土例がある。それらも合わせて、この紙面で紹介しておきたい。

#### 2

##### ① 大津市南滋賀 (南滋賀1丁目)

当調査地区内の地山直上の包含層より出土した。全長8.1cm、最大幅2.2cmを測り、断面は円形を呈し、10個の子を持つ(背部3個、腹部1個、左右側面各3個)。背部と左右側面の子の全長1.3~1.6cm、腹部2.7cmを測る。両端は、なめらかに屈曲して先端が尖る。表面には装飾は施されていない。光沢のある淡灰褐色の滑石製である。

##### ② 大津市南滋賀 (志賀小学校敷地内) (注1)

志賀小学校敷地の地均中に出土した。全長10cm、最大幅3.3cmを測り、9個の子を持つ(背部4個、腹部1個、左右側面各2個)。背部と左右側面の子の全長1.5cm、腹部2.7cmを測る。両端は、なめらかに屈曲しており、先端は、やや角張る。表面全体にわたり、円圈紋が施されている。石材は不明。志賀小学校に保管してあったが、現在は、その所在が不明である。

##### ③ 大津市滋賀里 (湖西線関係遺跡ⅢE区) (注2)

湖西線関係遺跡ⅢE区の黒色泥砂層から出土した。

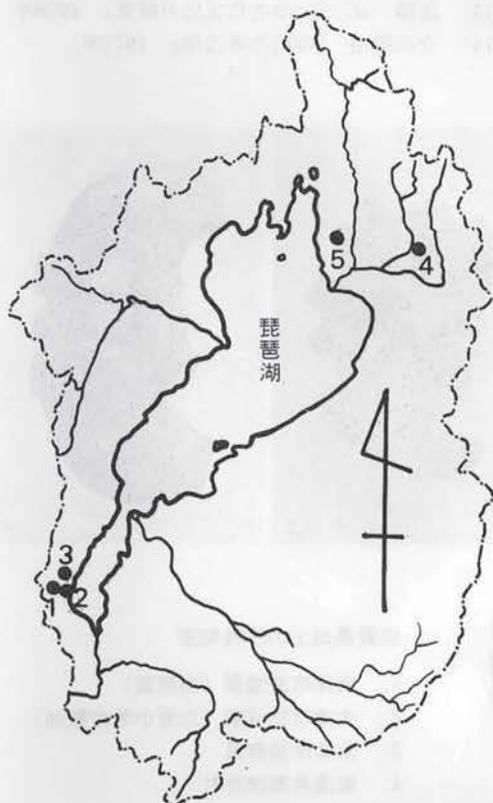
全長6.1cm、最大幅2.0cmを測り、断面は、ほぼ円形を呈し、10個の子を持つ（背部3個、腹部1個、左右側面各3個）。背部の子の全長1.2~1.7cm、腹部1.9cm、側面0.9~1.2cmを測る（腹部→背部→側面の順に小さくなる）。両端がなめらかに屈曲しており、先端は、丸みをもって尖がる。暗褐色の滑石製である。同じ層位の出土土器から5世紀代のものと思われる。現在、安土・近江風土記の丘資料館に展示中である。

④ 東浅井郡浅井町（注3）

出土地点は不明である。全長約5.0cm、最大幅約2.5cmを測り、10個の子を持つ（背部3個、腹部1個、左右側面各3個）。背部の子の全長約0.6~0.8cm、腹部約1.3cm、側面約0.7cmを測る。側面の子は丸い突起物で表現されており、腹部の子はその半分を欠損する。両端は鈍く屈曲し、先端は角張っておわる。表面に装飾は施されていない。石材は不明。浅井町の小学校に保管されているという。

⑤ 東浅井郡高月町（注4）

出土地点は不明である。高月町の民家に保管されているということであるが、実見することはできなかった。



子持勾玉出土地

3

子持勾玉は、その名が示すように大型の勾玉を母体として、その背部・腹部・左右両側面に子勾玉が付されており、その形態は種々あり、魚・鳥・剣等を表現しているといわれ、通常の勾玉と同様に一方に穿孔が施されている。

また、子持勾玉の多くは偶然に発見されたもので、単独出土か祭祀遺跡からの出土が多く、その時期が不明なものが多い。しかしながら、希に古墳や時期決定の可能な包含層からの出土があり、共伴副葬品や共伴遺物等から推測すると、古墳時代中期（5世紀中葉から6世紀）の所産であるといわれている。

子持勾玉は、多様な形態をしており、過去に幾度か形式分類が試みられている。

概括的にとらえると、古いものは母体の勾玉の断面が円形ないしは楕円形である。子は、概して小さく規則的に配列されている。全体の表現は写実的であり、母子の均衡が保たれて量感がある。

新しいものになると、母体の断面は扁平になる。子は大型化し、その数は減少する傾向にあり、2個の突起状の表現へと変化する。（注5）

これらのことから、滋賀県出土の子持勾玉（実見・写真等で確認できたもの）は、古い形式に属しているといえる。④は、他より若干新しいと思える。一さらに、時期が明確にとらえられる古墳出土の例（注6）と比較して5世紀後半のものであるということができよう。

4

子持勾玉の研究は古く、全国を訪れて多くの奇石・珍石を蒐集し『雲根誌』『曲玉問答』等を著わした江戸時代の木内石亭に始まる。

木内石亭は、その著書『雲根誌』において石剣頭と名付け、5例の子持勾玉を紹介している。しかしながら、近江国出土のものは記載されておらず、また、その具体的論考は、うかがえない（注7）。

大正時代、梅原末治氏は、子持勾玉がもつ形態は、魚の形をSymbolizeしたものであり、子の装飾は鱗の意味を持つと同時に小魚の意味を持っており、小魚を繰り返すことによって増殖豊稔の意味を表現していると論じている（注8）。

その後、昭和にはいり、島田貞彦氏は、その形態の奇形さから、他の先史時代の奇形遺物と同様に護符的な器物であると述べている（注9）。また、最近の調査の増加に伴い新しい事例も増加した。

湖西線関係の遺跡調査出土の子持勾玉から、その調査者は、比叡山の前山か、琵琶湖に注ぐ中小河川の水に関する信仰に用いられたものであるらしいと述べている（注10）。

藤原宮跡の井戸からは、新しい形式に属すると思われるものが出土しており(注11)、このことから、上記と同じく水に関する信仰を表わしているといえよう。

大阪南部の須恵器大生産地域においては、特に多数の出土をみている。なかでも、祭祀や信仰遺跡とは考えられない陶邑・深田遺跡からは、初期須恵器を伴ったものが出土している(注12)。

また、大陸に近い山陰地方にも、その分布の濃さを見る(注13)。さらに、最近、朝鮮半島においても、子持勾玉の出土が伝えられている(注14)。

これらのことを考え合わせると、朝鮮半島との関係、特に渡来系工人との関係も考えられよう。

また、本県下においては、琵琶湖の間にはさんで北と南に対置して出土しており、比叡山と伊吹山という近江の名峰の麓において出土しているという注目すべき点がある。

このように子持勾玉に対しては、種々の説があり、出土形態にも様々の現象がみられ、多面的な性格を持っている。

その性格について、一つの説だけでの説明では充分に言い表わされず、また、単に祭祀遺物であるというだけでは、かたづけられない問題を有している。さらに、この子持勾玉を出土した南滋賀遺跡は、先述したように大津宮時代の遺構を中心として、縄文時代から平安時代までの遺物を出土する。今回は旧石器時代の

ポイントや多量の弥生式土器および鏡片が出土した。このような状況のなかで、子持勾玉の納得のいく結論を得るためには、上記のことがらも勘案し、子持勾玉の出土状況および遺跡のもつ問題点を総合的にとらえ、多面的なアプローチを試みる必要がある。しかし、現在はまだ遺構・遺物を整理中のため子持勾玉の資料紹介にとどめ、稿を改めて詳細な論究を試みたい。

(須崎雪博)

(注1・7・8・9) 島田貞彦「有史以前の近江」『滋賀県史蹟調査報告』第一冊1928年 なお、②の単位は、原本の尺貫法をメートル法に変えた。

(注2・10) 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』1976年

(注3) 齊藤 忠『新訂 日本考古学図鑑』1965年

(注4) 近江風土記の丘資料館学芸員秋田裕毅氏の御教示による。

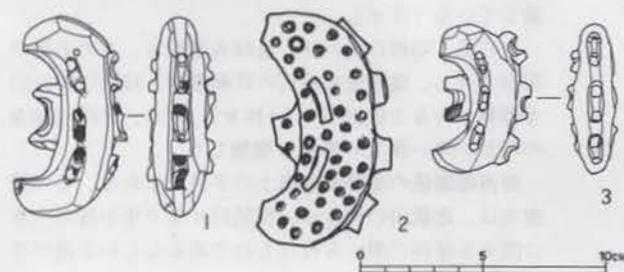
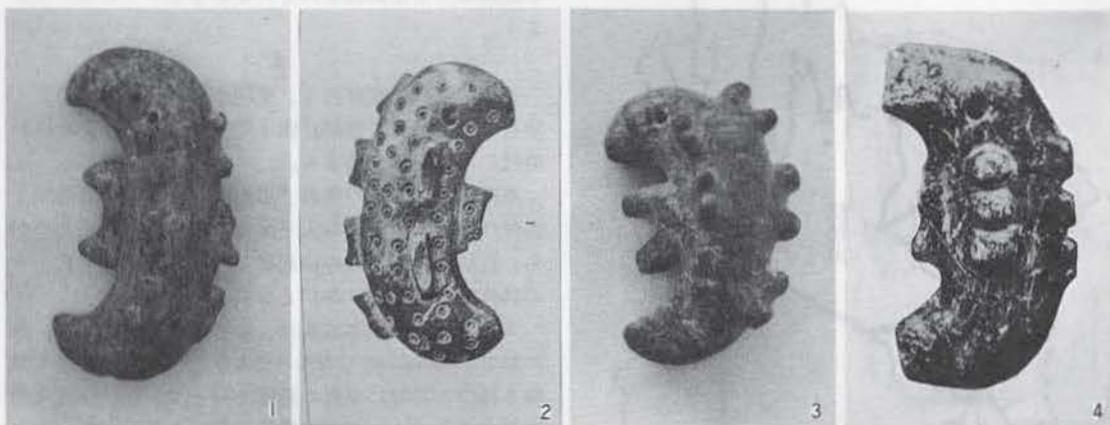
(注5・6) 平良泰久「長岡宮昭和50年度調査概要」(『埋蔵文化財調査概要』京都府教育委員会1976年)

(注11) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978年

(注12) 中村浩他『陶邑・深田』(大阪府文化財調査抄報2 1973年)

(注13) 近藤 正『山陰古代文化の研究』1978年

(注14) 金延鶴編『韓国の考古学』1972年



滋賀県出土の子持勾玉

1. 大津市南滋賀(当調査)
2. 大津市南滋賀(志賀小学校敷地)
3. 大津市滋賀里
4. 東浅井郡浅井町